

岩波
講座

日本文学史 第十六卷 一般項目

琉球の文学

仲原善忠

岩波書店

琉球の文学

仲原善忠

目次

一 古琉球の日本文学	三
二 琉球の文学	八
三 おもろ (1)	一〇
四 " (2)	一四
五 " (3)	三三
六 こいな	三七
七 みせせるその他の唱えもの	三〇
八 琉歌	三四
九 組踊と脚本	三七
参考文献	四三

一 古琉球の日本文学

琉球の文学、とここでのいうのは、琉球語で表現された文学のことである。琉球語が日本語と共通の祖語から出ていることは疑いないが、音韻・語彙・語法の上にならかなり大きなちがいが出来ている事実も否定できない⁽¹⁾。

琉球の文学を考える前に、文字を媒介として、彼の地に受け容れられた日本文学が、どのように成長し、消化されていたか、あらかじめ検討しておくことが、琉球の文学を理解する助けとなると思う。

琉球に文字が伝わった年代は明らかでないが、禅鑑という僧(日本僧?)が渡来し、浦添城の側に極楽寺をたてたのが文永年間(一二六四—一二七四)で、これが文字伝来の手がかりである。

琉球から、初めて明に使をやった洪武五年(一三七二)の表文が科斗文と記されているが、おそらく、仮名文字ではあるまいかといわれる(真境名安興『沖縄一千年史』三七五頁)。

金石文では、首里の安国山樹花木記碑が最も古いが^(宣徳二年、一四二七)、これは漢文である。仮名文では、真珠湊碑文^(嘉靖元年、一五二二)が初めてで、田名文書の中の辞令書も初めの方は仮名文である。

真珠湊碑文の書き出しは、(カッコ内及句読点は筆者)

「首里の王、おぎやかまい(王の名)かなし天の、み御ミ事(御詔)に、ま玉ミなどの、ミちつくり、はしわたし申候時の、ひのもの」とある。

格調のととのった見事な筆蹟で、日本名筆全集『金石文集』(入田整三編昭和六年雄山閣)に収録されている。辞令書は、(37×27cmの紙に九行)



琉球の古い辞令 (田名真章所蔵)

しよりの御ミ事

たうへまいる たから丸か くわにしやわ

せいやりとみひきの

一人しおたるもいてこくにたまわり申候

しよりより しおたるもいてこくの方へまいる

嘉靖二年八月廿六日

「唐(中国)へ参る宝丸の官舎(船の事務者)は、勢遣富引(王城内の勤務の部名)の、一人小太郎もい^{てこく}文字(小太郎は名、もいは美称、文字は職名)に賜わり申候。」

辞令の文字は、碑文とちがい、筆端生動し、自由奔放な草書である。

この時代は、古代文化(木・石の建築、彫刻、口承文学等)の最もさかんな時代で、文字の美事なことも、文化の高さと並行しており、この程度の筆蹟があらわれるまでには、十二世紀以前から平仮名が通用していたのではな

いか、と考えられる。

文章は、いわゆる琉球文である。

日本語の候文又は文語体の枠内で琉球語を自由に取入れた文章のことである。

室町時代からあとは、日本と琉球との交通は、かなりひんばんに行われていたらしく、日本文化の色が濃くなって来ている。

慶長十五年（一六一〇）八月尚寧王の一行が江戸につれて来られた。「言語も日本人とおなじ、但し少しづつは遠となり……日本のまねをして、詩・和歌・連歌、又、猿楽の能などもあり云々」（『通航一覽』巻一）

尚寧王の左右には、越前生れの宗味入道、堺生れの喜安入道等が茶道役として近侍しており、顧問格の菊隠和尚（後に摂政となる）は首里生れで、十数年の修業期間を京都ですごした人である。菊隠はサツマの文之和尚（南浦へ茶経を送るなど、風雅な交りがあり『南浦文集』中巻）、尊円城間とよばれた城間盛久は、お家流の書家として知られているが、島津との緊張の時も非戦派であった（『喜安日記』）。

この「いくさ」は、信長・秀吉とつづく、統一運動の余波が、サツマを通じておしよせたもので、サツマにおくれること十年にして、間接ながら幕藩体制の末端にくみ入れられたのである。

日本文化を身につけた人々は、非戦の側に立ち、中国に心酔し、虎の威を借ろうとした一派に引きずられて失敗した、ということである。

けれども、この事件を契機として、古代的文化を清算し、且つ孤立的、封鎖的経済の枠を破って、日本流通経済と結合したことは、文化の面においても、一步、前進する結果となったことは否定出来ない。

尚寧のあとをついだ尚豊（九〇—一〇四）は、人質としてカゴシマにいたことがある。実弟の金武朝貞がカゴシマに行くと、島津藩主家久は、『花伝書』と本阿弥光悦筆の『板行謡本百番』をかれに托して王におくった。又、王に伝えるため、朝貞に香道を伝授した（『大金武家家譜』）。

最初の史書、『中山世鑑』（一六五〇）を作った羽地朝秀（一七一六—一七五五）も、サツマ好みの人である。『世鑑』は片仮名まじりの和文で、『保元物語』『平治物語』等軍記物の引用が少くない。

かれは、摂政になって、政治を刷新したが、その改革目標の中に、婦人のあいだに根強く残っていた固有信仰の排

除があった。古琉球のものを清算し、日本の封建政治への接近を示標とした。

かれはまた、日琉同祖論のさいしょの提唱者で、官吏の任用資格の中に、学問算勘の外に大和芸能——茶・花・謡等——をあげている『仕置』⁽²⁾。

『混効驗集』(二七一一)は、古琉球語の辞書で、その説明には『源氏』『伊勢』『徒然草』『太平記』等を引用し、『呉竹集』『節用集』その他の辞書を用いて、語釈の傍証としてある。同書の末尾には、国文学に造詣ふかき識名盛命(五一—五七)が、三司官(三人の大臣の一人として名をつらねている。但し『源氏』その他よりの引用が、原本から直接引用したもののか、あるいは、辞書類よりの孫引かどうか、問題である。

前年、『おもしろさうし』の書き改めが行われた。この両事業にかれが、どの程度関与したか、明らかでないが、かれは沖繩の和歌の鼻祖といわれ、また『思出草』と題するサツマへの紀行文を残している。若いころ、僧形となり、瑞雲と号して京都にのぼり、修業した経歴の持主である。

十八世紀の初め(正徳・享保の頃)は、琉球の文芸・文化の再興時代で、祖慶正義(一六一六—一七四九)玉城朝薫(一六八四—一七三四)平敷屋朝敏(一七一三—一七四七)等、国文学に心をひそめた人が多かった。

玉城は後述の如く組踊の創案者で、平敷屋は『貧家記』『苔之下』等の和文の物語の外、組踊の脚本、『手水の縁』を残している。

『大島筆記』⁽³⁾には、「琉国にて、源氏伊勢徒然草など、いづれも見申す」「謡も内外二百番わたりて謡ふ」「浄瑠璃本は、近松の作多くあり、近年のものも多く来る」とある。

「和歌、和文、けまり、香、茶の湯、雙六等日本の如く弄べり」ともいい、「和歌の会は、按司家にて毎年八月十八日にあり」という。

同じ時代、阿嘉親雲上の『遺言書』に、自分の子の必読すべきものとして次のように述べてある。

六論、小学、四書精出して学び、成るべくは古文、詩経まで学ぶこと、歌書は詠歌大概、秀歌大略、百人一首……

古今集、後撰集、拾遺集……千載集、新勅撰、続後撰集……右の諸抄、……熟覧いたすべく候

和歌の庭訓、毎月抄、初学和歌式……これらの諸抄を以て、歌のよみ方をけいこ執行いたす可く候。

和書は、伊勢物語、源氏物語、徒然草などの書、精を出し……相はげみ、相学ふべき事 『阿嘉直識遺言書』⁽⁴⁾

士族の中には、和歌に心をよせる人はしだいに多くなり、香川景樹、八田知紀等の門下となった人もあり、宜湾朝保⁽⁵⁾は、八田の門下、かれはサツマから来駐していた在番奉行、福岡季連等とともに和歌を奨励し、一時門弟子数百人に上ったという。

この人々の歌を一首ずつあげておく。(カッコ内は活動期)

春雨は、くるゝ軒端に、ふる寺の、入りあひの鐘の声ぞ寂しき

花と見し、人の姿も夢なれや、うつゝに残るあとしなれば

たまさかに、むすぶとすれば夢さめて、夜半のあらしの音ばかりして

しばしとも、いはぬはつらき色ながら、またかへり見る山吹の花

人とはば、いかに答へん言の葉も、およばぬ不二の雪のあけぼの

うつ音の、たえ／＼なるは小夜衣、月にねられぬさみなるべし

誰にかも、契りおきけん逢坂の、関のこなたに松虫のなく

野にすたく、虫のこえ／＼かまびすし、たがきゝわけて品さだめせん

八人の内、読谷山、浦添は王子で、浦添は摂政、識名、与那原、宜湾、玉城、平敷屋も上流士族の出で、識名、与

識名盛命 (十七世紀末)

惣慶忠義 (十八世紀初)

玉城朝薫 (右に同じ)

平敷屋朝敏 (右に同じ)

読谷山朝憲 (十八世紀末)

与那原良矩 (十八世紀中期)

浦添朝薫 (十九世紀初め)

宜湾朝保 (十九世紀末)

那原、宜湾は、三司官に選ばれ政治を担当した人々である。

王国時代の国文学の概況は、右のように、上流人士のあいだには、かなり深く入っていたと見られる。しかしながら、文字を知らぬ一般庶民や女性には、使いなれ、聞きなれた琉歌こそわがものと感じていたので、和歌の影響はあまり受けていなかった、と見られる。

注

- 1 服部四郎、金城朝永「琉球語」(『世界言語概説』下巻)、大野晋『日本語の起源』七九頁。
- 2 羽地朝秀『仕置』、羽地の摂政在任中の令達、覚書、所感等を集録した文書集。
- 3 宝暦三年(一七六三)土佐国、大島浦に漂着した琉球船の乗員、潮平盛成しおひらせいせいに対する、土佐の儒者戸部良照の聞き書きで、内容は、極めて正確である。
- 4 東恩納寛惇ひがしななかんじゆん『沖繩の今昔』
- 5 宜湾いわん(一八一八)は、文久二年(一八六二)三司官となり、明治六年(一八七三)まで在職、王国末期の困難な政局を担当した。

二 琉球の文学

琉球の文学は、「おもろ時代」と「琉歌及び組踊時代」の前後期にわかれる。前期は古代的、民族宗教的色彩のつよい、おもろ歌謡を中心として展開した口承文学で、尚真王時代(一四七七—一五二六)を頂点とし、その後、しだいに衰退する。

後期は、古代性を脱却した琉歌を主流とし、新らしく、組踊くみおどりの脚本としての劇文学が生れる。尚敬王時代(一七一三—一七一五)が最盛期である。思想内容は儒教的教訓的で、勸善懲惡、封建倫理を支柱とした中世文学である。

二百年をへだてて聳立する二つの山の裾野に、島津侵入という川が流れている。古代文学は、この事のために衰えたのではない。すでに、生命を失い、民衆の関心を失っていたものが、この事件を契機として、清算されたにすぎない。

琉球の古代文化は、単に周辺文化の模倣ではなく、これを刺激的栄養として個性的な香気を放ちつつ開花したものであった。

その文化は、前述のように、十六世紀を頂点としておとろえ、その世紀の末には枯れしぼんだのであった。

尚寧王は、島津の捕虜となり、遠く海をわたって、サツマにつれ去られた。北風が吹きはじめた一六一〇年の冬、王の身の上をあんじて、王妃のよんだおもしろがある『おもしろ草紙』九ノ三五・一三ノ一四七。

一、まにしが、まに／＼
一、真北風がまね／＼

ふけば、

吹けば、

あんじおそいてだの

按司襲い王の^{てだ}

おうねど、まちゆる

お船ぞ、待つれ

又、おゑちがおゑちが

又、追手風が追手風が

ふけば

吹けば、

(折り返し)

これを最後のまたたきとして、おもしろの火が永久に消え去ったことは、誠に印象的である。

- 一、まにし—真北、真北風。サツマへ上る船は夏秋の南風(は／＼)にのって行く。下りの船は、冬春の北風に送られて来る。
- 二、あんじおそいてだ—王の尊称。「てだ」は太陽のことであるが、地上の太陽になぞらえた。あんじおそいは、もと地方の

支配者を按司というたので、諸將領を支配する（襲う）との意で、王の尊称。三、おゑち―追手の風、順風。

第一節の一行と二節の一行は対句をなし、まにしが↓まに↓、おゑちが↓おゑちが、と不手際ではあるが対語をなしている。対語、対句、折り返しと、おもろの慣用的手法を三つともそなえているのもあわれである。

このおもろは、三十字の琉歌に改作されている。

にしかぜのまにし、吹きつみておれば、あぢおそいてだの、お船ど待ちゆる。

「北風の真北風、吹きつづけているから」の意となつていたので、説明に墮ち、改作は成功とはいえない。もっとも、このおもろに限らず、琉歌への改作は少くないが、おもろの意味と香気をまともに表現したのは少い。

三 おもろ (1)

おもろは「思い」を意味し、琉球の古代歌謡の総称である。もともと、おもいというたのが、首里に王都をいとなり、支配階級の住地となるや、言葉も階級的となり、おもろと改められたと考える。

農村では、今ももとのまゝ「おもい」とよんでいる。しかし、現在のおもいは内容も形式もはなだしく変つて来ているので、『おもろさうし』に収録されたものに限りおもろと称し、地方に残存するものは、おもい（又はおもり）とよんでいる。

おもろは、おそらく神祭りに起源をもつもので、それから次々と枝葉をひろげたものであろう。

お祭りは、集落の鎮守にあたるお嶽の前で行われ、稲の二祭り、雨乞いその他の農耕儀礼が中心であった。司祭者は氏族の長の妹で、祭の内容は、神に対する祈願で、それが神との共食共楽であるから、集落のレクリエーションと

もなった。

妹神（おなりがみ）は神がかりして神となり、神託を述べ、神の歌をうたった。神がはなれると彼女は人であり、神と人との仲を取りもつ役目をなし、神への祈願を述べ、歌をうたう。祭りの場に群れあつまり、心が浮き立っている人々が、神女の歌に唱和し、互に謡いかけ、謡いかえした。

おもろを謡い出す動機を注記したのがいくつかある。『おもろさうし』巻二の二四、巻五の五四―五七、巻三の五〇、巻六の五二―五三等で、中には祭礼の場でないものもあり、巻二の二四の如きは、祭礼や神と何等関係のない事件である。

故事に、むかし、あかのこと申す名人、或る時、安谷屋^{あだや}辺に罷過候折、童子ひとり蕪の荷をかたげ参候を、その蕪一つやらね（ぐれないか）と申。されば童子荷を卸、鎌にて蕪の皮を去り、四つにわり捧ル。されば、名をばいかにあれば、「まつ」と答ル、その時給り申おもろ也。

と注したのが、次のおもろである。「故事に」は「伝え言う」の意。

くに中のしよりもりぐすくがふし

一、あだにやの、わかまつ

あはれ、わかまつ

よださちへ、うらおそう、わかまつ、

又、きもあぐみの、わかまつ、

一、安谷屋の若松

あはれ若松

枝栄え、浦おそう若松

又、肝あぐみの若松

（折り返し）

あかのこ（又はあかいんこ）は、おもろの名人で、今では琉球音楽の神とあがめられている。かれは、松という少年

のけなげな振舞に感動し、即座におもろを謡い、かれの前途を祝福した、ということである。

一、安谷屋は、中城村の大字の名、「あかのこ」は、即興的にうたい出したが、「国中の首里杜城」という一般によく知られているふしで謡ったのである。二、若松は、このおもろのためか、中城若松なかつくまつという美貌の少年としてもてはやされ、後世、執心鐘入という組踊の主人公として取りあげられている。安珍に擬せられたのである。三、「肝あぐみ」のあぐみは熱望する意で、肝あぐみは愛する意味に使われ、安谷屋の別名ともなっている（巻二の二五、二六）。

おもろは謡われたものである。『おもろさうし』に収めた千二百四十三首中、ふし名のないものが百六十首あるが、その中六十四首は、巻一四のゑさおもろである。「ゑさ」は、集団舞踊で、一つのふしだから記入のないのが当然で、特殊なふしで謡った六首だけ記したものであろう。

おもろは、また舞踊を伴ったものが少くない。これも祭礼の場における神がかりのこうふん状態からおこったものであろう。伊平屋島いへやの神女の、みせせる（神託）及び、のだてごと（祝詞）の終りに「コノ言葉ニテウタヒ舞フ」「是言葉ニテ諷躍也」等と記してある『琉球国由来記』巻一六）。

これは、いわゆる神遊びで、『琉球神道記』にも神がかりした神女等の様子をほのめかしてある。「守護ノ神現ジ玉フ……毎月出デテ託アリ。所々ノ拝林ニアソビ給フ。持物ハ御簀ナリ。唱ハ御唄ナリ。……神離給フ則レバ女等タダチニ死ス……赤土ヲ水ニ和シテ飲マシムレバ暫クアリテ活ス。」（袋中上人『琉球神道記』⁽¹⁾巻五）

『おもろさうし』巻九、いろ／＼のこねりおもろ（三十五首）と、巻一二、いろ／＼のあすびおもろ（九十四首）が舞踊と結合したおもろである。

「あすび」は、広い意味をもち、神遊び、舟遊びから、室内の歌舞、野外の歌舞、労働を休んでぶら／＼することまで包括する。

巻九は、おもろの本文のわきに、舞いの手を注記してある。「こねり」は手振りの一種であるが、おもろ時代の舞踊の代表名のようなのである。こねるの対語はなよる、外にしぬぐというのがある。こねるは、手振りで、なよるは、身振りを指し、「しぬぐ」は稲の成育を促進する呪術的意味をもつ舞踊ではないかと考えられる。長野県伊那郡旦開村あさけの雪祭の神婆の舞と同じものか。

巻九の九 おにさんこがふし

一、よよせ、きみの

(神女名)

おれてあすべば

おしあわちへ、をがで、おしおろちへ、うちあげる

ひやしうちあげば

二ておち、二てこねる

きみもなよら

又、おもひきみの

おれてあすべば

一、よよせ君が

天降りして遊べば、

打し合わし、舞で、打し下ろし、打ち上げる。

(鼓)拍子打ち上げらば、

二手折り、二手こねる。

君も、踊らな、

又、思ひ君が、

天降りして遊べば

(折り返し)

このおもろに注記された舞いの手は、「打し合わし」「舞んで」「おしおろして」「打ちあげる」「折りて」「こねる」の六手である。

巻九の五では、「根は、右二手折りて、こねて、左手こねる」「いらえ(答)は、左二手折りて、こねて、右手こねる」と、相舞いの姿を浮き彫りしてある。

卷一二の遊びおもろは、このような定型化したものではなく、神遊び、舟あそび、野あすび等の歌を集めたものである。

おもろは、第一に韻律的なことは音楽的に表現し、その中には舞を伴ったものも少くなかった。舞いも、その起源は、前記伊平屋の唱えもののような形であつたろうか。

おもろは、このような混沌たる状態から初まり、周辺文化の刺激と栄養を受けて成長したといえよう。

おもろを日本文学に類型を求めるならば、それは西郷信綱氏の言われるように、『記紀歌謡』から、『万葉』の一部、さらに『神楽催馬楽』にいたる歌謡群をあげるべきであろう。

時代は数世紀のズレがあるが、文化の中心からはなれてゐる後進地帯のことだからやむを得ないことである。

注

1 浄土宗の僧袋中は、慶長八年（一六〇三）琉球に渡り、三年滞在の後帰国、『琉球神道記』五卷、『琉球往来』上下巻を著す。

2 『おもろ新釈』で筆者は、おもろを、神楽・催馬楽に比した。西郷氏が、本文に記した通りの見解を出されたので（『新日本文学』昭和三十二年十月「沖繩の古謡『おもろ』について」）、これを取り訂正した。

四 おもろ (2)

おもろ時代は、日本史の平安末から、鎌倉、室町を経て安土、桃山時代にいたる六世紀にわたっている。時代はまさしく中世紀であるが、文化段階は古代に相当すると前にも述べた。

だがしかし、鎌倉時代からあとは、交通もひんばんであつたと見え、各時代の言語、芸能、下級宗教などが流れこ

んだあとがおもろには明瞭にあらわれている。

このような外部の影響とともに、おもろの基盤となった社会の変遷が反映している。

十一世紀ごろまでの集落はマキヨ（日本語マキ）と称する氏族共同体で、それは、山の中腹または丘の上にあり、水利をたよって水田農業をいとなんでいた。神祭は今もそこで行われる。

マキヨの紐帯は、同族意識で、鎮守のお嶽に天降りする神を祭る儀礼によって維持された。氏族の中心は根家^{ねや}とよび、その家のあるじが氏族の世話役で、その妹（おなり）が司祭者である。これを根神とよぶが、氏族の長のおなり神である。妹が神事を、兄が世事を担当するとの習俗は、ずっと後の世まで一貫していた。王国時代には、王は政治を、その妹は、「聞え大君^{おききみ}」と称する最高の神女であった。初めのころ（十五世紀）は、未婚の処女が任じられたが、しだいに王妹の未亡人、または王妃も任命された。しかし、いずれの場合も、妹の霊力をもって、兄なる王を守る、という信仰があった。女性の感受性の優位をみとめることは、十七世紀になり、儒教道德が一般化するまでつづいた。

セヂとよぶ一種の霊力が信じられていた。⁽¹⁾セヂ高き女性が神女の適格者で、セヂ高き杜が、神のおりるお嶽である。聞え大君の別名はセダカコという。セヂ高の人を意味し、彼女のおもな任務は、王にセヂを奉り、長寿延命を希求することであった。

太陽崇拜もまた重い信仰の一つで、現実的には、太陽の化身たる火の神を各家庭に祀ってあった。火の神は三個の海石を立てた原始的なかまどである。

霊力は、メラネシアのマナに似たところがあり、一方、日本上代のケという觀念に通ずる点もないとはいえない。太陽崇拜は東南アジアという広汎な地域に共通する習俗の一つではあるまいか。アマテラス大神が聞え大君と同じく女性であることが想いおこされる。

この時代のおもろの主題は、神、太陽その他の天体讃美、神への祈願等、信仰儀礼が中心になっており、おもろの形式も二節のものが多い。

次は按司時代である。アチとよぶ武人が各地におこり、氏族集団たるマキヨは、解体し、集落は浦又は島、あるいは里などとよばれる。氏族は、祭祀団体として、残存し今にいたるまで、古俗のおもかけを伝えている。

按司たちは、城をきぎずいて、その中に居住し、領内の住民から租税を取り立てた。新田をひらき、農具も充実し、生産も増大したであろう。築城、造船、家づくりも活潑となる。おもろもこれを反映し、これらのことが内容となって来る。

按司たちの支配圏は小さきまぎまで二三部落という狭いものから、十数部落にわたるものもある。彼等は集落の根神の上にさらに「ノロ」又は「キミ」をおいた。按司の妹神にあたるものである。

十四世紀の末に中国との進貢貿易がはじまる。おもろには「とうおきない」（唐商い）とうたわれている。足利義満の進貢船派遣より三十二年前の一三七二年である。

このころ、「ゑさおもろ」とよばれる新しいおもろがあらわれる。巻一四の七十首である。

ゑさは、囃子の名で、これまでのおもろとちがひ、集団舞踊を伴う。ふし名のあるのは、七十首の内の六首で、外のものは、同じふしで、六種は、特殊なうたい方があった、と考えられる。おもろの内容は、世間の評判になっている事件を取りあげ、これを讃美し、諷刺し、嘲笑したようなものが多い。現在行われている七月エイサー（集団舞踊）の先行形態と見られる。

巻一四の一五　くめす世の主のふし（訳文だけかかげる）

一、勝連まみな子が病んでゐる